

現代のコミュニケーション・ツールとしての ZINE

——顔が見える他者を引き寄せるメディア——

西川 麦子

1 なぜ、今、ZINEなのか

アメリカやイギリスにおいて、Zine（ジン）とは、個人やグループが作る小冊子をさし、自主的に制作し、自分たちで頒布する印刷物である。日本語では、ジンやリトルプレス、ミニコミ、同人誌、フリーペーパー、などと呼ばれることもある。出版物、冊子とはいっても、印刷した1枚の紙を折ったものから、数枚をホッチキスで綴じたものや製本し背表紙がある冊子まで、その形態はさまざまである。ジンの多くは、商業的な利益を求めてはいない。自己表現の手段であり、自分以外の他者に何かを伝えるメディアでもある。世界に1つしかないジンもあれば、知人たちに手紙のように届けあう数だけコピーしたものや、発行部数が数10から数100、それ以上に及ぶ場合もある。なかには商業雑誌のような販路をもつ場合も、自称ジンと呼ぶことはできる。

ジンという名称は、アメリカで1930年代にSFファンたちが情報を交換し交流するために作った“fanzine”に由来する。40年あまり後、1970年代には、パンクロックなどのファンたちによるコピー機で印刷してホッチキスで綴じたファンジンが、ライブ会場などで交換された。1980年代以降は、他のさまざまなジャンルのファンジン¹⁾が作られ、またアメリカでFACTSHEET FIVEなど、ジンを紹介する批評雑誌も発行され、世界のジンのファンたちのあいだで読まれた。(Duncombe 2008 [1997]: 11, Friedman 1997: 13)。インターネットが普及した1990年代以降も、ジンは多様に展開し、さまざまな意味でマイノリティの立場にある人々の、生の声を伝える手段ともなり、ジェンダーや人種や移民など多様なテーマを扱ったジンが作られてきた。また、アート作品としてのジン (art zine)、コミックの小冊子 (mini comic) もあれば、日常の暮らしのなかのパーソナルな体験を表現したジン (perzine)、健康や料理や道具の使い方、モノ作り、旅、環境問題、人種差別、政治について扱うジンもある。

ジンは、その社会、時代、あるいは地域について知る情報の宝庫であるが、私がこの論文で注目するのは、個々のジンの内容についてではなく、紙媒体のジンが、デジタルな情報化時代に存続しているという現象についてである。アメリカやイギリスや日本でも、地方や都市でもジンのワークショップやジンフェスなどのイベントが開催されるなど、ジンをめぐる活動が、パーソナルにローカルに、ときにはグローバルに展開している。ピープマイヤー (2011 [2009]: 17-18) は、「ジンは参加型メディアであり、企業型の文化産業というより、むしろ消費者たちによって作られるメディアのひとつの例であり、1990年代なかばにインターネットの興隆によって終焉が予測されていたにもかかわらず、近年の資本主義文化に継続中の潮流の一部として残っている」と述べている。

「SNS 隆盛の時代に、なぜ、今、ジンなのか」、この問いは、2015年カルチュラル・タイフーンで行われた座談会「En-Zine (Zine の輪): 反時代的対話醸成装置²⁾ (2015年6月14日) のテーマでもある。この座談会のコーディネーターである小笠原博毅は学会プログラム (Cultural Typhoon 2015: 68) に次のように記している。「1970年代のポピュラー音楽シーンから生まれた Zine カルチャーは、いまやネットやラジオなど他のメディアとの連動によって、インディペンデントな媒体としてはより先鋭的に、活字メディアとしては発生当初とは異なる役割を担っている。特定のファンダムや社会・政治時評からオルタナティブなライフスタイルの模索に至るまで、Zine は『同人誌』文化が前提としかつ依拠していた内輪の解釈共同体をむしろ打ち破り、まだ見ぬ外部との対話を作り出す契機となりうるのではないか？」

インターネットが普及しデジタル化した情報が迅速に世界を駆け巡る時代に、紙媒体のジン作りに多くの人が関心をもつ背景には、DIY カルチャー、オルタナティブメディア、多文化社会、マイノリティ、アイデンティティ、グローバリゼーションとローカリゼーショ

ンなどさまざまな問題と重ねて考えることができる。本稿では、ピープマイヤーがいうジンの「参加型メディア (participatory media)」という側面に注目する。手作りの感触を残すモノとしてのジンが、作り手と読み手のパーソナルな対話を生みだし、他者をつなぐコミュニケーション・ツールとなりうる特質を、筆者がジンを制作しこれを英米国で頒布するというメディア実践と、ジンに関わる人々とその活動や場所を取材するフィールドワークをとおしてとらえていきたい。

本章に続く2では、筆者の調査研究の方法について説明し、3では、筆者のアメリカにおけるジンカルチャーとの出会いから、*Grassroots Media Zine (GMZ)* 創刊に至る経緯を述べる。4では、GMZ制作を筆者のロンドンでの調査研究にとり入れることによって、どのように議論の場が生じフィールドワークが展開してきたかを報告する。そして最終章の5では、座談会「En-Zine (Zineの輪)」の内容も参考にしながら、デジタルな情報化時代におけるジンカルチャーの意味を考察する。

2 メディア実践と調査研究と教育現場

個性あふれる自主制作の冊子をジンと呼ぶことを知ったのは、2010年9月から1年間、アメリカ、イリノイ州のUrbana市に滞在したときである。その街のUrbana-Champaign Independent Media Center (UCIMC, NPO) に、地域で発行されたジンを集めたZine Libraryがあった。サイズや形も多様な冊子が、政治や環境や音楽やアートなど、いくつかのジャンルに分類されてボックスに入っていた。多くのジンは背表紙がなく、手にとらなければ、それが何なのか分かりにくかった。ジンを集めた棚の前には、ソファとテーブルがあり、ゆっくり座って手作りの冊子に触れることができた。

2011年4月から私は、UCIMC内にあるコミュニティラジオ局WRFU-LP104.5FMにおいて、Harukana Showという毎週1時間の日本語ラジオ番組³⁾を始めた(西川2012)。アメリカのラジオ局スタジオと日本をインターネットで接続して話す生放送番組である。帰国後も日本から番組の企画・進行役を担当し、現在も、機材担当のガルザ(Thomas Garza)を含む、アメリカ、日本、韓国から7名あまりのメンバーとともにHarukana Showを継続している(西川2013a, 2013b, 2014a, 2014c)。

このラジオ番組が扱うテーマの1つがDIY (do it

yourself) カルチャー⁴⁾ やオルタナティブ・メディアであり、アメリカや日本のジンについてもしばしば話題としてとりあげてきた。番組スタッフの一人である立石尚史が、日本でジンやフリーペーパーを制作し関連イベントにも参加していた。このため、アメリカだけでなく日本における、「ジン」という言葉の普及やそれをめぐる活動を知ることができた。ラジオ番組制作をとおして日米のジンカルチャーにふれるなかで、私とガルザが始めたのが、*Grassroots Media Zine* の制作である。「草の根の活動とメディア」について扱う英文冊子であり、これまでNo.1 (2013), No.2 (2014), No.3 (2016) を発行した。GMZ創刊号は、英語圏における「日本語」ラジオ番組Harukana Showの活動を、「英語」で伝えるために作成した。続くNo.2, No.3は、私が2001年より行っているロンドンでのフィールドワークを、「コミュニティ活動とメディア」というテーマのもとでまとめている。日米でのGMZの制作と英米国での頒布をおして、異なる場所でのジン文化に改めて接し、そこで得た情報や体験をラジオ番組でも伝えている。

2015年度からは、科学研究費補助金(基盤研究B海外学術調査, 研究代表者西川麦子)「多文化社会における“コミュニティ”活動とメディア戦略に関する実践的研究」を得て、これまでのコミュニティラジオ番組制作とGMZ発行という2つのプロジェクト(合わせてグラスルーツ・メディア・プロジェクト⁵⁾と呼んでいる)を継続しながら、英米での地域活動とメディアに関する現地調査を実施している。自らのメディア実践とフィールドワークを重ねることで、実践をとおして学んだことを、調査研究をとおして再考し、ラジオ番組やジン制作をとおして伝え直すというフィールドワークの方法ともなっている(西川2016c)。

また、日米英におけるメディア実践とフィールドワークを、大学教育のなかで社会調査やメディア関連の科目における表現・協働・発信力を培うアクティブ・ラーニングの方法としても応用している⁶⁾。メディア実践、調査研究、教育現場での試みが影響しあうトライアングルな展開が筆者の研究活動の特徴であるが、本稿では、メディア実践とフィールドワークを中心に扱う。

3 ジンカルチャーとの出会い

3-1 商業文化に与しないメディア

2011年にHarukana Showを開始してすぐ、UCIMCでMini Maker Faire(4月16日)と、Midwest Zine



写真1 Mini Maker Fair, UCIMC, 2011年4月, 写真は全て筆者撮影

Fest（4月30日、5月1日）が開催された。前者は電子部品などを使ったモノ作りの、後者はジンの展示、販売会である。ラジオ番組の取材をかねて、イベントを見学した。ミニ・メーカー・フェアでは、UCIMC 1階の広いホールにある舞台上、大人たちが自分たちで作った不思議な電子楽器を必死になって演奏し（写真1）、それぞれのブースでは、派手な手作りコスチュームを展示販売し、何に使うのか分かりにくいクラフトやパソコンの部品で作られたアートを並べていた。子供だけでなく大人が夢中にモノ作りをとおした関係を楽しんでいる様子が印象に残った。会場には UCIMC の活動の1つである Radical Librarian Group がジンを展示し、2週間後にせまった中西部ジンフェスについて宣伝していた。そこで同グループのリゾ（Chris Rizo）にラジオ番組への出演を依頼し、第4回 Harukana Show（2011年4月22日）では、リゾから英語でジンについて話を聞いた。

リゾは、ライブラリアンの資格をとるためにイリノイ大学で情報学などを学んでいるときに、図書館で一般に扱う書籍や雑誌とは異なるジンを知った。商業主義やマスメディアのメインストリームに抗し個々人の声を形にするメディアだという点に興味をもち、UCIMC のラディカル・ライブラリアン・グループに加わり、ジン・コレクションの活動に携わるようになった。リゾはそうした自己紹介とともに、ジンの魅力と自分たちのグループの活動、ジンフェスについて次のような内容を話した⁷⁾。

「ジンは、出版業界のメインストリームや商業主義には与しない独自の展開をしてきました。ジンは、多くの費用をかけず、簡単に自分で作ることができます。広い流通経路はありませんが、地域によっては独立経営の書店やレコードショップで取り扱っています。メ

インストリームから排除されがちな個々人の声、その地域、社会に生きる人々の多様な視点、発想、考えが表現されているのです。また、アメリカでは DIY の大きな流れがありますが、ジンもそのひとつです。

さまざまなテーマを扱ったジンがあります。もともとは SF のファンジンや好きなバンドについてのファンジンなどから始まりました。70年代、80年代は、インディーズのバンドがセルフ・プロモーションとしてもジンを作りました。最近では、よりパーソナルな人生や暮らしを語るパーズン、DIY に関するジン、たとえば自転車の修理や、料理、たとえばベジタリアンの食などもよくあるテーマですね。健康やセクシュアリティについて、LGBT（Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender）などについてのジンもあります。あなたが読みたいと考えるテーマについては、それに関するジンがたいていはあります。

ラディカル・ライブラリアン・グループが集めたジンは、UCIMC のジン・ライブラリーでいつでも閲覧できます。ジンイベントに参加し自分たちが作ったジンを展示、販売しながら、いろいろなジンを集めます。UCIMC のライブラリーを紹介するジンを作って配り、ジンを寄贈してくださいと呼びかけています。また、いくつかの助成金を得て、地域のいろいろなグループとともに、ジンを作る、普及させるワークショップを実施してきました。そうした活動が実って、いろいろな団体と協力して今回のミッドウエスト・ジンフェスを開催することになりました。これはジンを読む、作ることが好きな人たちが一堂に会するイベントです。」

ラジオ番組の20分あまりのトークのなかでリゾは、ジンがメインストリームに抗するメディアであると繰り返し強調していた。放送の1週間後、中西部ジンフェスへ足を運んだ。

3-2 不揃いなジンへの「親近感」

UCIMC の1階ホールの会場には、U-C からだけではなくイリノイ州を中心とした他地域から集まったジンスタ（zinester: ジンの作り手）たちが、20あまりのテーブルにそれぞれのジンを並べ、壁や天井から紐をつり下げジンを飾っていた。シルクスクリーン印刷の実演や T シャツが販売され、ジン作りのワークショップも行われていた。イベントの開催側もジン作家も参加者も、会場にいる人たちがわけへだてなく話している様子は、メーカーフェアと共通していた。私は、ジンイベントに参加した感想を、Harukana Show のブログ⁸⁾に次のように記した。



写真2 Zines, UCIMCのMidwest Zine Festより, 2011年4月

「楽しみにしていたジンフェスへ行ってきました。昨日のHarukana Showで、立石さんが話されていたような、ロンドン・ジン・シンポジウム(2005)での、『ジンな人たち』が結集した熱気はなく、それぞれのブースで、さまざまなジンの作り手と訪れた人たちがゆったりと時間をともに過ごす、そんな土曜日でした。

販売されているジンは、数ドルから10ドル以上のものもあります。どれをとっても、微妙にサイズが違うことが(当然かもしれませんが)、発見でした。あるジンは、冊子の表と裏の両方から物語が始まり、恋人たちの異なる視点から、微妙に心がゆれながらお話がすすみ、真ん中のページで、それぞれのストーリーが出会い、ハッピーエンド、そんな作り方もありました。手書きもあれば、印刷された文字も、白黒もカラーも、いろいろです。ことばだけでなく、イラストからも、何かしら、モノ作りの空気が伝わってきました。私は、布や紙へのシルクスクリーン印刷が、懐かしく、見っていました。

あるブースでは、お菓子のおまけやガラクタやそしてキュートな冊子が入った小瓶が並んでいました。私は、子供の頃、ザリガニ取りにいった日の思い出を絵巻に書いて、いろいろなモノといっしょに小瓶に入れて、庭に埋めたことがあったなあ、と思い出しました。そんな話をしたら、『タイムマシンね!』とブースのお姉さんとまりました。

ピンク色のジンやTシャツも買ってしまいました。Harukana Album⁹⁾に、今日の写真をアップロードしました。」(2011年5月1日掲載)

UCIMCのジンイベントで販売されていたジンは、市販の書籍と同じくらい完成度が高いものもあれば、表紙から中身の紙がはみでているなど素人らしい作品もある(写真2)。手にとる人にとっては、形が不揃

いなジンにも、かえって親近感をいだく。ピープマイヤー(2011: 132)は、こうしたジンの「不完全性と作者自身の関与のしるしが、読者たちをジン・コミュニティへ招く」と述べている。作家の筆跡やレイアウト、紙の使い方、イラストなどから、読者はジNSTAたちの生身にふれる感覚をいだく。これをピープマイヤーは、「作り手の身体性(zinester's body)」とよび、ジンの特質ととらえている¹⁰⁾。

ダンカムもまた、「ジンの挿絵は、個人的な手紙の端っこにかかれたいたずら描きやスケッチを思わせるもので、親密な間柄をあらわすやり方である」と述べ、ジンの世界では、「技術的な専門性よりも、ジNSTAは、作家やアーティストと彼/彼女が描いているものと、ジンを読んでくれる人たちのあいだの絆に重点をおく」(Duncombe 2008 [1997]: 104)、としてジンが生み出す作り手と読み手の関係性に注目している。

3-3 GMZ 創刊一見まねでジンをつくる

ジンの作品としての敷居の低さ、読者と作家のあいだの親密な関係は、ジン読者を作り手に変えていく。ジンのクリエイターたちも、しばしばジンの作り方のコツを伝え、こんなふうにやってみたらと励まし、ジン作りについてのジンも多い(Duncombe 2008: 130)。ジン読者が見まねで自分でもジンを作るようになる現象をダンカムは、「エミュレーション」(emulation)とよんでいる(同書: 129)。

ジンに触れると自分でも作りたくなる。Grassroots Media Zineを発行する際にHarukana Showの番組サイトに、「創刊号のテーマは『多文化接触のメディア空間』』という見出しをつけて、次のように説明している(2013年9月20日掲載)。

「Grassroots Media Zineの創刊号ができました。Harukana Showを始めて2年半、その間、番組スタッフの立石さんから、ジン作りについて度々お話を伺いました。また、UCIMCには、ジン・ライブラリーがあり、ジンフェスが開かれ、さまざまなジンを見る機会もありました。作者のスピリッツや作品の肌触りが、紙や文字やインクやデザインから伝わってくるのが、モノとしてのジンの魅力です。ジンを作りたい、と考えてきました。

ようやく最初の一冊、ジンのタイトルは、Grassroots Activities and Mediaを縮めてGrassroots Media Zineとしました。ここでのメディアとは、人と人、情報、場所をつなぐコミュニケーション・ツールという意味です。著者はMugiko Nishikawa、編者はTho-

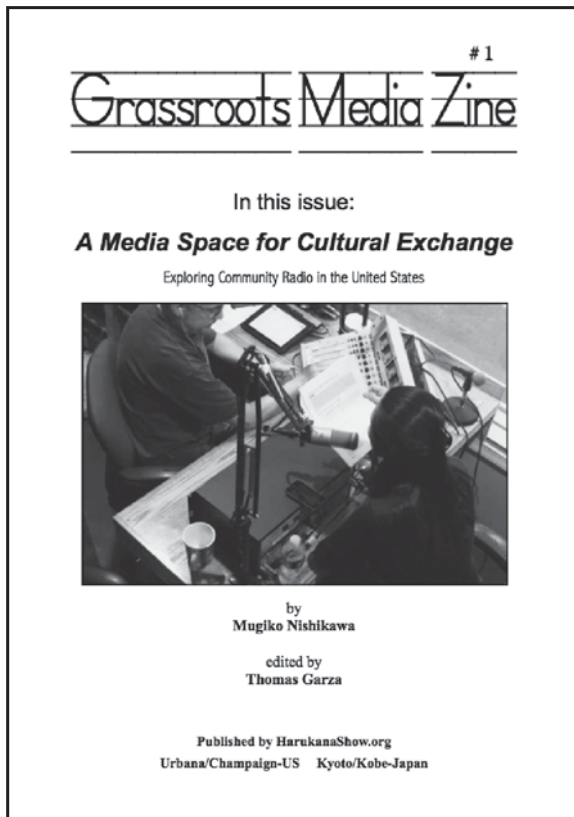


図1 Grassroots Media Zine, No. 1, 中扉

mas Garza です。西川麦子『多文化接触のメディア空間—米国のコミュニティラジオから』（西川 2013a）をもとに、私が英語で内容を大幅に加筆し、写真や図を加えました。トムさんが最終的な英文作成とジンの編集、レイアウトを担当しています。アメリカでレターサイズと呼ばれる紙を二つ折りにした大ききで、本文は18頁です。シャンペーンの印刷屋さんでコピー、製本しました。」(図1)

英語によるジンを作ったのは、自分たちの活動を Urbana-Champaign で出会う身近な人たちに知ってほしかったからだ。英語圏で日本語ラジオ番組を制作しても、その意図や活動の内容をラジオ局や UCIMC のメンバーにもなかなか伝えられない。また、ロンドンでのフィールドワークの延長線上にイリノイでのメディア実践があることを、イギリスの知人へも伝えたいという思いもあった。英語ネイティブではなくても、フォーマルな形がないジンなら、とりあえず、作ってみることができそうだった。また、内容については、個人の体験として書いてみようと考えた。ロンドンでの調査から、なぜ渡米し、そこでコミュニティラジオ局の活動に関わったのか、そこにどんな葛藤、迷い、発見、驚きがあり、どのようなつながりが生まれたのか。

GMZ 1 は200部作成し、UCIMC のジン・ライブラ

リーにも納め、当センターや WRFU のメンバー、U-C 在住の知人、イリノイ大学関係者に手渡し、いろいろな場面で Harukana Show について説明する際にも利用した¹¹⁾。イギリスへは近況報告の手紙を添えて知人たちへジンを送った。

4 フィールドワークとジン

4-1 フィールドワークを紡ぎ直す

2011年よりイリノイでのコミュニティ・メディアの活動に関わるようになり、私が長年調査研究をしてきた1960年代のロンドンでのコミュニティ活動や対抗文化に、改めて関心を深めた。インターネットを利用できない時代に、それぞれの志をもった活動家たちがどのような媒体を作り住民に働きかけ、人々が対面的に出会う場を作り、地域内外の個人や組織と連携していたのか。10年間の取材記録を整理し、それぞれの運動の「作り方」を、活動家（アクター）の視点からとらえていきたい。60年代のノッティングヒルを舞台に、人々のインタビューをまとめた物語を、GMZ に掲載することができるだろうか考えた。

GMZ の共同作者のガルザは、Champaign Urbana Immigration Forum の代表を務め、アメリカで移民問題に取り組んでいる（西川 2014a: 120-124）。渡英経験はないが、出身地が異なるさまざまな人々が集まる60年代のノッティングヒルやそこでの活動に関心を持ち、GMZ の制作を続けることには前向きであった。しかし、私が英語でさらに書くことに躊躇し GMZ 2 の制作に踏み出せないでいるときに、2014年2月、スチュアート・ホール（Stuart Hall: 1932-2014）が亡くなったことを知った。その2年半前に、ロンドンのホールの自宅を訪問し2時間ちかく話を聞いた。そのインタビューを形にすることもできないままになっていることを悔いた。次のジンは、ホールへのインタビューをまとめることから始めようと決心した。

ホールは、ノッティングヒルにおける1958年の人種暴動とその後の英国の政治的、社会的背景とニューレフトの活動について、英語でゆっくりと私に語り聞かせた（西川 2015: 144-147）。その内容は、続く号のジンで1960年代のさまざまなアクターとその活動を紹介していくうえで、読者にとっては当時の場所と状況を知る分かりやすい序章となる。また、私は、人から人へと紹介され、60年代の活動家たちの現在も続くネットワークを、それとは知らずに歩き最後にホールへたどり着いた。2011年7月にホールとどのようにして出

会ったかを書くということは、それまでの10年にわたる私のロンドン調査の経緯をたどり直すことになる(西川 2015: 143-144)と考えた。

ホールのインタビューと当時のドキュメントを含む英文資料をもとに、最初に私がジンの構成を作り英文草稿を作成した。これをもとに、ガルザへの口頭説明と議論を重ね、ガルザが英文をいったん仕上げ、それをもとにまた何度も意見を交わした。私はロンドンでインタビューをした人々から、60年代の活動に関わった研究者たちのアカデミックな議論と住民の暮らしの現状とのあいだの隔たりや、学識者が使う言葉や文章の難解さについての批判の声を聞いていた。ジンを作るのであれば、フィールドワークで出会った人々が、最後まで読みとおせる文章を書きたい。これがGMZ制作において、ガルザと私が共有している基本方針だった。ようやくできたGMZ 2の第1原稿を、私がインタビューをした人々、つまりは、そのジンで描いた物語に登場する人物たちにメールと郵便で送った。

2014年9月、ロンドンに2週間の滞在をし、原稿を送った一人一人を3年ぶりに訪ねた。私は、これまでのインタビューを、自主制作のジンを含む出版物に書くことについて改めて説明し、書面でも承諾を得た。原稿については、どの人も受け取って数日のうちに読み、気づいたことを率直に指摘してくれた。アメリカ英語とイギリス英語の違いを含む英文の添削から、事実認識の誤り、解釈の違い、感情的な批判まで、さまざまなアクションがあった(西川 2015: 153)。

長年の調査のなかで私は、取材相手の自宅を訪ね、一人一人との対話を重ねてはきた。しかし、振り返ってみると、話をしてくれた人は、私が他の誰と会い、その人が何を語ったのかを知る機会はほとんどなかった。GMZ 2の原稿を読むことで、私の調査の時間と過程の全体像を改めて知り、また、自分以外の多くの登場人物の「語り」にふれることになる。そこで記憶が甦ったり、異なる意見を抱くこともある。数年ぶりに再会した人々が、原稿に記された自分たちが登場する「物語」に触発されて、目の前の私に向かってさらに話し始めた。

日本に戻ると、イギリスでえた多数のコメントをもとに、アメリカ在住のガルザとインターネットをとおして協議しながら、原稿を加筆修正し、レイアウトや写真、イラスト、ジンのサイズ、紙、製本等の細部を検討した。ハーフレーターサイズで44頁、アメリカで300部を印刷、製本した。2014年末、GMZ 2は完成した(図2)。フィールドワークとジン作りに関わった

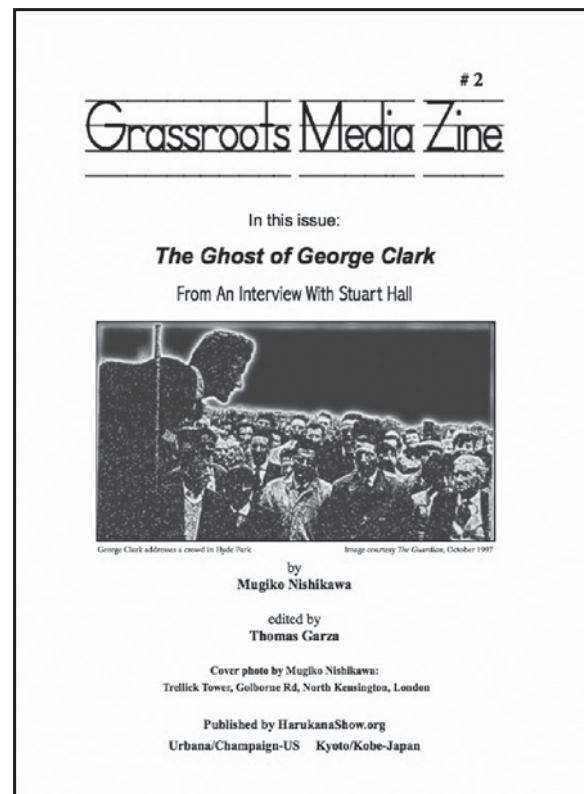


図2 Grassroots Media Zine, No. 2, 中扉

20人あまりの方にまずは、クリスマスカードとともにジンを送り届けた。

4-2 「語り」を紙にデザインする

GMZ 2を作りながら、3号以降では、3人の活動家に注目し3つのタイプの運動¹²⁾について、それぞれ号を分けて扱おうと考えた(西川 2015: 148-150)。1960年代のロンドンの対抗文化活動の旗手的存在だったジョン・ホッピー・ホプキンズ(John 'Hoppy' Hopkins: 1937-2015)も、その一人だった。1966年に彼が中心となってノッティングヒルでロンドン・フリー・スクール(LFS)を設立した。その活動について取材をするために、2009年にホプキンズと初めて会った。この時、すでにパーキンソン病を患っていた。彼は、私からの取材が記録され、形になり、自分の存在が人々の記憶のなかに残ることを望んでいた。計7回にわたる面談でホプキンズは、60年代の対抗文化の活動だけでなく、70年代以降、彼が専門として携わったコミュニティ・ビデオについても話した。私は、ホプキンズとの出会いをとおして、オルタナティブ・メディアについて学び刺激を受けた。ホプキンズは、不自由な手でメールを打ち、私のアメリカでのメディア実践を励ましてくれた。2014年9月に彼と最期に会ったときには、複数の介護者が交替で24時間、付き添っていた

(西川 2016a: 90-92)。

ホプキンズは、2015年1月30日に亡くなった。イギリスのオンラインの新聞の追悼記事をとおして知った。GMZ 3は、ホプキンズの特集号とした。彼への20時間あまりのインタビューを繰り返し聞き、文字に起こし記録を読み直した。深刻な話題でもユーモアを交え聞き手を楽しませるホプキンズの「語り方」をできるだけ生かして編集した。LFSのニューズレターなどのドキュメント、先行文献、他のインタビューを組み合わせ、ジンの構成をつくり原稿を書いた。これをもとに、ガルザと私がネット上で何度も議論し、私が渡米した際に顔を合わせて話し合い最終原稿を仕上げた。A4用紙76枚の長編となった。この原稿をロンドン在住の関係者に送ったあと、2015年9月に渡英し、2週間ロンドンに滞在した。

ホプキンズの友人たちは、原稿の隅々まで読み細かくコメントをしてくれた。ホプキンズの話には多数の人物が登場し、話題が多彩に展開する。当時のアンダーグラウンドな文化活動に精通し同時代を知る人でなければ分からないことも多い。ホプキンズの語りが登場するが、私が会ったことがない人物へも、紹介者をへてメールで原稿を送った。たとえば、マイルズ(Barry Miles: 1943-)は、ホプキンズと60年代に出版などさまざまな活動をともした。その後、作家となり、当時、活躍したミュージシャンや作家などについての多数の本を出版している。マイルズは、多忙な執筆活動のあいまに時間を作り、二度にわたってGMZ 3の原稿を読み、メールで貴重な指摘を書き送ってくれた。

GMZ 3では、ホプキンズの語りを60年代という時代にこだわってデザインした。文章だけでなくジンのレイアウト、フォント、イラスト、表紙をとおしても、ホプキンズが活躍した時代を表現した。取材のなかで撮影した写真や当時の資料を挿絵として選び、その他に、私が何枚かのイラストを描いた。60年代のドキュメントと並べると、スケッチブックに手描きした鉛筆の線や文字が、イラストとして馴染む場合もあった。ガルザは、60年代のニューズレターのタイプライターの文字や‘International Times’のようなアンダーグラウンドの新聞で使われていた字体をイメージして、フォントを選び、全体をレイアウトした。冊子のサイズは、イギリスや日本で使われているA4とし、本文は2段組、全体で70頁となった。本文は白黒であるが、表紙はカラーにした。紙は、私が東京の印刷会社¹³⁾を訪ねし、ジンの内容とロンドンの図書館のアーカイブで手

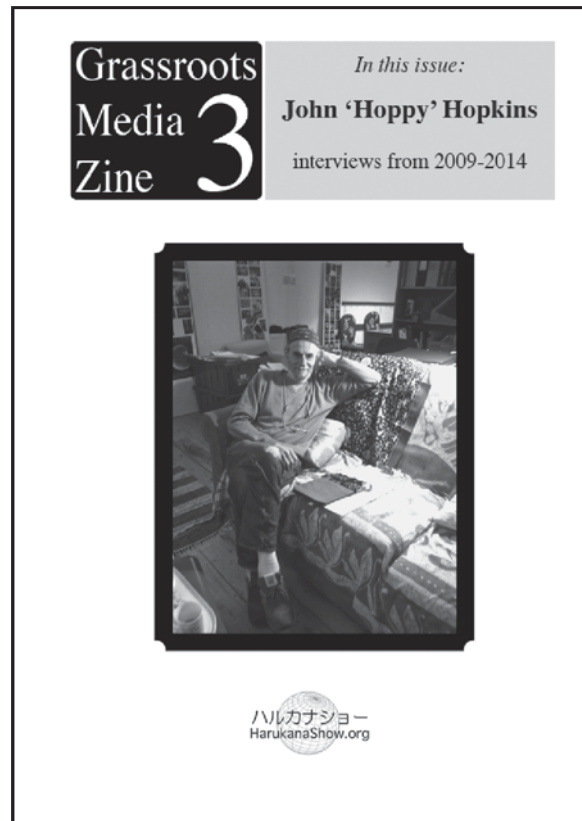


図3 Grassroots Media Zine, No. 3, 中扉

にした60年代の紙の手触りと色を説明し、本文と表紙の紙を選んだ。

こうして、日米英を移動しフィールドワークを行いながらインターネットを使い編集者のガルザと議論を重ねた。そしてアメリカから送られてきた最終版のPDFを東京の印刷所へ送り、2016年4月、GMZ 3、500部が出来上がった(図3)。

4-3 ジンがつなぐ縁

GMZ 3は、イギリスでお世話になった人々へ複数部ずつ郵送した。受取人たちは、それぞれの知人や関係機関へGMZ 3を送ってくれた。2009年に私をホプキンズに紹介したリッチ(Adam Ritchie 1940-)は、友人たちへメールで連絡し、希望者にGMZ 3を手渡し、あるいは郵送してくれた¹⁴⁾。GMZは、それまでのフィールドワークのつながりを紡ぎ直し、そこで出会った人々がもつ関係を伝いながら、その友人や関係機関へ届けられた。また、私がロンドンやイリノイを訪ねた際には、GMZを携え、ジンを扱う独立系書店やレコードショップ、図書館などを訪ねた。

私たちがGMZの扱いを最初に依頼した書店は、Housmans Bookshopである。ハンズマンズは、1945年、ロンドンに設立された老舗の独立系書店(NPO)



写真3 Housmans Bookshop の Zines (本棚左), 2016年9月

である。King's Cross と St. Pancras International という地下鉄と鉄道の駅に近く、人が集まりやすい場所にある。同書店がある建物は、長年、平和運動や、左翼やアナキスト・グループ、アンダーグラウンドな活動の拠点となってきた。今でも、書店のスペースを使い、トークイベントなどが行われ、集会場としても利用されている。ノッティングヒルについてのインタビューでも、60年代のそれぞれの活動のなかでハンズマンズを集会場所として利用したという話がよくでてくる。GMZ 2, 3 で扱った話のなかにも、この書店が活動の重要な場所として登場する。私は、書店から配信されるニュースメールにジンに関する情報が掲載されているのをみつけ、担当者にメールを送り、GMZ を委託販売してもらうことになった¹⁵⁾。

2016年9月に渡英した際にハンズマンズを何度か訪れた(写真3)。そこで、以前、取材をし、GMZ 2 の話のなかでも登場するが、長年、連絡がとれずにいた人物とも偶然に再会した。私が GMZ 2 と 3 を手渡し、今後のジンで彼のインタビューや名前を掲載することについての許可を得た。彼は、GMZ 2 を開き、仲間に、「ここに書いてあるのは、自分のことだよ！」とうれしそうに見せていた。

後日、ハンズマンズで開かれたトークイベント¹⁶⁾を見学した。偶然、隣に座った人と話すなかで、自己紹介として GMZ 3 を見せた。すると彼は、「ホッピー(ホプキンズ)は、自分たちのヒーローだった」と言い、60年代の思い出を私に話し始めた。ジンを手にとった人の口から瞬間的に、60年代とホプキンズについての記憶があふれだすのを聞いて驚いた。GMZ がこの書店の本棚にあることによって、誰かの手に渡り、ホ

プキンズの声が人々にゆっくりと届くだろうと思った。

2016年9月にロンドンに滞在したときには、ホプキンズの親友2人と初めて会った。一人は、原稿を丁寧に添削してくれたマイルズであり、もう一人は、60年代半ばからイギリスで活躍したアメリカ人レコード・プロデューサーのボイド (Joe Boyd, 1943-) だった。どちらも、60年代について自分の経験を詳細に記したエッセイを出版しており、GMZ 3 を書くときにも重要な参考文献となった (Miles 2003, 2010, Boyd 2006)。彼らと直接会って話すことによって、ホプキンズの言葉を改めて読み直す機会となった。

アーティストのフェザー (Stuart Feather) とともに初めて会った。彼は友人にすすめられて GMZ 3 を知り、Harukana Show org. にメールで入手方法を問い合わせさせてくれた。このことをロンドンのリッチにメールで伝えると、彼は、「フェザーは、1970年代の Gay Liberation Front の活動について興味深い著作を出版したばかりだ」と教えてくれた。また、フェザーは、リッチの友人の友人だということがわかり、私のロンドン滞在中に、皆で会食をすることになった。1971年に設立された GLF は、ノッティングヒルを拠点に活動をしていたが、私はそれまでの調査のなかで、彼らのコミュニケーションやその活動についての話を、同じ頃、同じ地域に活動をしていたはずの人たちから聞くことはほとんどなかった¹⁷⁾。ホプキンズが語り残した言葉とジンは、これまでの取材では会う機会がなかった人々のつながりを私のフィールドワークにたぐり寄せることになった。

日本人作者とアメリカ人編集者が悪戦苦闘して取り組んだ60年代のロンドンを舞台としたジン作りに、何人もが協力してくれた。商業出版の書籍は、編集、校正、レイアウト、挿絵や装丁デザイン、紙選び、印刷、製本など、出版までのさまざまな工程をそれぞれのプロが引き受ける。ジンは、多くの作業をできる限り自分たちで担い費用を低く抑えて作る。出来上がった作品にも、時にはさまざまな「不備」があるが、それは制作の足跡であり個性でもあり、作者と読者のあいだの距離感を縮める。

GMZ の場合は、フィールドワークにおける「聞き手」と「語り手」(インフォーマント) が、ジンに描かれた60年代の物語においては登場人物となり、さらにジン作りにおいては、「作り手」と「読み手」(評者) として出会い直す。そこで生じる多様な対話を編み込んで、シリーズとしての GMZ を作る。その「手間」

のかかるプロセスが、フィールドワークにおける「調査者」と「インフォーマント」との関係を、読者を含むゆるやかな議論の場を開き、さまざまな話者による記憶と記録をつなげてゆく。Harukana Show においても、毎週のトークの収録音源を編集し説明文と写真を添えて番組のウェブサイトに掲載し、誰でもアクセスできる開かれたアーカイブとなっている。しかし、ウェブサイトとジンが大きく違うのは、ジンは、それを受け取った人の手に、感触あるモノとして残るという点である。

5 コミュニケーション・ツールとしてのジン

イギリスやアメリカでの GMZ の作成と頒布は、ジンカルチャーを支える人々やその活動に出会う新たなフィールドワークとなった。インターネットが普及した現代において、ジンはどのように存在し、意味をもつか。2015年6月のカルチュラル・タイフーンでの「座談会」のテーマであった「反時代的対話醸成装置としての ZINE」について、本稿の最後に、ジンカルチャーを支える人々のネットワーク、DIY カルチャー、自発的表現、顔が見える他者との接触、という4つの側面から考察していく。

5-1 「ジン脈」と場所

2015年と2016年の調査においては、シカゴやロンドンにある独立経営書店、レコードショップ、ジン・コレクションがある図書館、ジンなどの自主出版を支援する場所や本格的な印刷・製本機械をそなえたスタジオなどを訪ねた¹⁸⁾。こうした場所は、さまざまな種類のジンを手にとって見ることができるだけでなく、人と人が出会い情報を交換する場ともなっている。そこにいるスタッフや関係者は、自分でも(かつて)ジン作りを楽しみ、またジンをめぐるワークショップやジンフェアなどのイベントに関わっている場合もある。GMZ を見せて説明すると、ジンについて話がはずみ、「あの人に会うといい」「この場所へも訪ねてみたら」と紹介された。

2015年9月のロンドン滞在では、まずイーストロンドンにある Institution of International Visual Arts (Invia) のスチュアート・ホール・ライブラリーを訪問した。ここにジン・コレクションがあることを知り、メールで連絡をとり事前に GMZ 2 を郵送していた。Invia では、スタッフが、ジン・コレクションについて説明し、その日、たまたまライブラリーに来ていた

アーティストのアサン (Hamja Ahsan, 1981-) を紹介してくれた。人権保護活動家であり、自身もジンを編集し、DIY CULTURES というイベントにも関わり、若い世代のジンカルチャーの担い手の一人である。アサンに尋ねた。「日本でジンはクラフト的なモノ作り/表現として若い人に広がっていたり、あるいはジンとは呼ばれないけれどコミック・マーケットが盛んだったりしますが、それと政治的な活動は重なりにくい気がします。イギリスではどうですか。」アサンからは、「DIY CULTURES では、いわゆるオタク (Otaku) と政治 (politics) がまったく別のものとしてではなく、重なりながら展開していると思います」という応えが返ってきた。英語での会話のなかで、オタクという単語がさりげなく使われていることに驚いた。

Invia のスタッフはまた、London College of Communication (LCC) に、規模の大きなジン・コレクションがあり、(当時の) ライブラリアンのカシア (Leila Kassir) に話を聞くといい、と言って連絡先を教えてください。さっそくメールを送り、LCC を訪問し、ジン・コレクションを閲覧した。ここには、2000あまりのジンが収集されている。カシアへのインタビュー(後述)の後、彼女が教えてくれたのは、イーストロンドンにある bookartbookshop である。GMZ 2 を携えてこの店を訪問した。ブック・アートを展示、販売しているが、狭い店舗の三分の一には背表紙のないジンが本棚に並んでいる。

経営者のペイショット (Tanya Peixoto) は GMZ 2 を見て、「テキスト中心のジンは、この店で扱うことは難しいけれど、あなたはこのジンをどうしたいの?」と尋ねた。私は、「フィールドワークでさまざまな人から話を伺い学んだことを、誰にでも分かるかたちにして伝えたい。そこからまたいろいろな人と対話をしていきたい。そういうコミュニケーション・ツールとしてジンをつくっている。あなたにこのジンを受け取ってもらえればうれしい」と話した¹⁹⁾。私がそこにいた数時間のあいだに、いろいろな人が店を訪れた。アート系の本を見るために来た人もいれば、ロンドンの地図があるかと尋ねる観光客や、近所の人も立ち寄る。若いアーティストが、この店で扱ってほしいと作品を見せると、ペイショットは、作品の作り方、価格設定など彼女の意見を率直に述べていた。夕方になるとその日は店内の特別展示のオープニングパーティーに関係者が集まってきた。

ロンドンやシカゴでも、ジンに関わる場所で出会っ

た人々は、私が突然に訪問したにもかかわらず時間を割いて、彼らの活動について話し、ペイショットのように真剣に私に問いかけてくれた。ジンはさまざまな種類があり、それを扱う場所や活動の意図は一様ではないが、ジンを展示、販売するだけでなく、情報や道具やスペースや経験をシェアし、そこに集まる人々が交流する場となっている。

2015年のカルチュラル・タイフーンの「座談会」で、諫山三武（『未知の駅』編集長）は、「ZINEづくりとは、自分の興味関心から生まれたZINEが中心となり、その周りに集う読者・制作者・賛同者のゆるやかな、顔が見える規模の、『自分の友達の友達』くらいの、小さなネットワーク（地図）を作る行為²⁰⁾」だと話した。ロンドンやシカゴにおいても、ジンカルチャーに関わる人々がそれぞれに、諫山がいう顔が見える「地図」を作りながら、一方でSNSなどを活用しているような「地図」が連なり重なる草の根のつながりをひろげている。そうした人と情報のネットワークのなかで、ジンや本作りのワークショップが開催され、規模の大きなジンフェアなどを成功させている。ジンが好きな人々のあいだの「ジン脈」とそれを結ぶ場所とが、現在のジンカルチャーを支えている。

5-2 DIY カルチャーへの志向

「なぜ、今、ジンなのか」という問いにたいして、ジンカルチャーを支える人々は、時には、商業主義やメインストリームを批判し、時には、SNSやデジタルな作品とは違う、モノとしてジンの面白さを強調し、それは今日のDIYカルチャーへの志向と重なりと説明する。LCCのジン・コレクションの設置に関わったカシアは、現在のジンをめぐる状況をわかりやすく説明している。2015年9月16日、LCCのライブラリーの前で、カシアはジンが入った箱を抱えて現れた。学生たちがいるロビーのソファに座って、事前に送った私からの質問²¹⁾に答えるかたちで、次のような内容の話をしてくれた。

「LCCは、かつてはLondon School of Printingと呼ばれた学校でした。印刷に関しては長い教育の蓄積があります。今でも、デザインとメディア、印刷について重点的に学ぶことができます。ライブラリーにも印刷をめぐる500年ほどの歴史をたどる貴重な資料を集めたアーカイブがあります。しかし、一般の人々が発信する印刷物の収集はあまり行われていませんでした。そこで、2009年からジンの収集を始めました。

かつては、インディペンデントなレコードショップ

や書店がジンを扱っていました。私が10歳代の頃は、パンクのライブにゆくと会場で1ポンドでファンジンが売られていました。しかし、80年代、90年代に、そうしたお店が次々閉店し、数が少なくなりました。そこでジンをとおして交流する場を多くもたない現代のジンの作り手が、自分たちでジンフェアを企画、実施するようになりました。たとえば、現在でしたら、DIY CULTURESなどのイベントが毎年開催されています。

この図書館のジン・コレクションにあるジンも、そうしたフェアで収集し、またオンラインでも入手しています。現在でも、いくつかの本屋さんではジンを扱っていますし、またこうしたジンを持ち込み、寄贈してくれることもあります。この図書館にあるジンは、70年代後半から現在のものまで、種類はさまざまです。ジンの基本情報を入力して検索できるデータベースを作っていますが、たくさんのジンをとくに分類はしていません。

最近のジンは、政治関連であっても、より大きな政治というよりも、アイデンティティ・ポリティクス(identity politics)に関するものが多いです。フェミニズム、ジェンダー、セクシュアリティに関するもの、クエアジン(queerzine)、ゲイジン(gayzine)などです。また、パージン(perzine)も多数あります。よりパーソナルなジンです。自分の好きな食べ物や料理などから環境、ライフスタイルに関して、精神的な病氣、摂食障害についてなど、パージンと呼ばれるものの範囲はさまざまです。

パソコンとインターネットが普及し、紙媒体の印刷物は消滅するだろう、と言われたこともあります。ところが、紙媒体への関心は薄くなるどころか、あえて紙にこだわる人は少なくありません。ジン作りも、自分の手で作る面白さ、手触り、紙だから伝わる温もり、親密さ(intimacy)があります。手で作り、手渡しする。DIYへの関心が、現在のジン作りの流れにはあります。

若い人たちでも、パソコンを使わず、あるいはプリントアウトしても、それをわざわざハサミで切って、写真などととも紙に貼り付け、コピーする、そんなジンを作る人もいます。70年代、80年代には、他に選択肢がなかったからですが、現在でも、その手作り感にこだわり、楽しんでいる。しかし、そうした人たちがインターネットを利用してないわけではありません。自分のサイトを持ち、SNSを使い、しかし、それとは別にジンも作る。発行部数は、100、200といっ

たものから20より少ない場合もあります。いずれにせよ、儲けることを目的にしているわけではありません。

LCC では、商業デザインを学ぶ1年生が受講するジン・プロジェクトでは、200人あまりの学生たちが課題としてジンを作ります。ジン制作についても講義を受けますが、しかし、ジンとはそもそも決まった形はなく、授業のなかで学んできたデザインのルールといったものを、ジンでは気にしない、あるいは通用しないので、学生たちは、たくさんのジンを手にとって見ても、それらがそのまま手本になるわけではなく、自分がジンを作るときには、自分で考えなければならない。何のために、どんな素材で、どのように作るのか。それは刺激的な経験です。』

カシアの話は、現在のイギリス（あるいはロンドン）のジンをめぐる状況についてだけでなく、「紙という物とおした表現、ジンがもつ心身に呼びかける力のようなもの」を改めて考えさせる。Harukana Show のなかで立石は、自分のジン制作やそれをめぐるさまざまな出会いの話をしてきた。そこで強調してきたことも、自らが描き、編集し、パソコンと身近な文房具を使いながら仕上げていく DIY なジン作りの魅力であり、またコピーした冊子を綴じる作業などへの参加を周囲に呼びかけ一緒にジン作りの工程を楽しむ面白さである。それは紙の上での表現に限らず、T シャツや布袋へのシルクスクリーン印刷へとひろがり、また、それらを携えて書店や音楽ライブのイベントへも参加するというかたちに展開している。

ジンの作り手は、また自らのブログをもち SNS を駆使し日々の営みをインターネット上で伝えながら、しかし、モノ作りにこだわり、またイベントなどでの会場で、ジンをとおして人と出会う場面を大切にしている。それは、私がこれまで見てきたイリノイの UCIMC で開催されたミニ・メーカー・フェアやジンフェス、ロンドンの ICA で開催された Artist Self-Publishers' Fair (写真4) などにおいて、作り手、参加者、イベント関係者がへだたりなく、モノ作りをめぐるエピソードをあれこれ語り合う様子にも共通しているのではないかと思う。

5-3 自発的な表現行為

ジン作りには、身近な紙と文具を使い自分で工夫して作り上げる面白さがあり、ジンに関心をもつ人々の対面的な関係をつなぐネットワークが現在のジナルチャーを支えている。だとしても、人は、なぜジンを作るのだろうか。



写真4 Artist Self-publishers' Fair, ICA, 2016年9月

ヴェイグ (Tom Vague) は、1970年代末から発行しているジン 'VAUGE' のタイトルであり、彼のペンネームでもある。もともとは、パンクロックやフットボールに関心をもちファンジンを作っていたが、ノッティンゲヒルの地域史、アンダーグラウンドな文化活動、あるいはポップ・カルチャー史に関心をもちテーマを広げながら今日まで 'VAUGE' を発行してきた。トム・ヴェイグとは、2008年にノッティンゲヒルの60年代の調査のなかで知り合い、渡英すると会い情報を交換してきた。2015年9月にヴェイグに会った時に、こんな話をしてくれた²²⁾。ベテランのジンスタであるヴェイグは、最近では、ジンについてのイベントにもよく招かれる。あるイベントで話し終えた後、参加者から、「SNS についてどう思うか。私は、ファンジンはもっとラディカルなメディアであって、Facebook は自堕落 (self-indulgent) に思える」と問いかけられた。ヴェイグは、SNS をあまり活用していないが、次のように応えたという。「私たちがファンジンを作り始めたときも、(1970年代に)ゼロックスの機械を使い写真を貼ってコピーすることは、新しいことでした。その時々可能な方法やメディアを利用していく営み自体は、ソーシャルメディアもファンジンも同じことだと思います。」ヴェイグはさらに私に、「ファンジンもまた、パーソナル・オブセッション (personal obsessions) に過ぎない」と自分の意見を付け加えた。

パーソナル・オブセッションとは、脅迫観念から、妄想、執着、こだわり、愛着、あるいは原語の意味からははずれるが、マイブームなど幅広い意味にとらえることができるが、ヴェイグがいうジン作りの原点は、誰かに頼まれるわけでもなく、自分の思い入れやパッションから始まる行為だということではないか。立石 (2016: 79) は、「『ZINE』は名詞というよりもむしろ動詞のようなものとして、あるアイデアなり好奇心なり切実な訴えなどを、何らかのカタチにして人に伝

える行為そのものをひろく捉えるコンセプトになりうるのではないかと思う」と述べている。

5-4 顔が見える他者をつなぐ

ジン作りは、その人の自発的なアクションであり、ジンには作り手の、その時々思いが、文章やイラストやレイアウトや冊子の綴じ方に表現され、ピープマイヤーという作り手の「身体性」を残す。しかし、ジンは、閉じた世界のなかでの表現ではなく、作者の身体からいったん切り離されたモノとして存在し、他者に引き渡される。「手頃な大きさの」モノとして人の手から手へと渡るといった感覚は、インターネットのなかでのやりとりとは異なる。ジンには、作者の思い入れとモノとしての感触がある。ジンフェアやジン作りのワークショップでは、参加者がジンを並べたそれぞれのブースや作業机を囲んでジンを手に取った感想を伝え合う距離の近さを楽しんでいる²³⁾。

現在の私たちの暮らしのなかでは、しかし、紙媒体のジンと、インターネットの世界とが断絶したのではなく、目的や状況によって使い分けられている。2016年11月のHarukana Showのなかで、Urbana Free Libraryでジン作りのワークショップ²⁴⁾が開催され、また、ミズーリ州にあるSt. Louis Public Libraryではジン・コレクション²⁵⁾が設置されたと伝え、「アメリカの地域の図書館がどうして今、ジンに注目しているのだろう」と話題にしたことがある。そこで、番組スタッフであり、アメリカの大学図書館に勤務する小牧龍太が、図書館という場所も利用者のニーズの変化にあわせて、少しずつ変わってきているという次のような内容の話をした²⁶⁾。

「今の図書館は、かつてのような『本』を読む場所とは限らない。本自体がデジタル化されているし、また人々は本よりインターネットから情報を得るようになり、パソコンやインターネットを使うために図書館へ来る人も多くなっています。図書館も、利用者のニーズに応えながら、情報収集にとどまらず、物作りや(たとえば、ファブラボ)や映像制作による情報発信、アートとしての自己表現、などもできる場所へと少しずつ変わってきています。ジンは、地元情報をはじめ、扱う領域の幅広さ、簡単に作れる手頃さという点において、地域の図書館にとって便利な媒体です。小さなメディアだからこそ、地域にふれる媒体となります。また特殊な材料や器具を必要とせず、紙と筆記具とハサミとホッチキスがあればよい。もう少し材料、機材をそろえて、図書館でワークショップを開催し、わい

わい言いながらみんなで作ることもできます。」

パソコンとインターネットの普及で、私たちは、個人が随時に多様な情報を得ることができ、また、自分を表現し伝えるという行為を、SNSなどを利用してより多くの人が身近に体験して、「自分を語る」ことへの動機も多様化した。さまざまな選択肢があるなか、ジンを作るには、手間もかかり、そのうえ流通経路も限られている。ジンをどうやって人に見せるか渡すか、届けるか、その方法を自分で探さなければならない。人に届けるという行為やそのための場面や場所作りもまた、ジンにまつわるDIYな関係作りである。そうした作り届けるプロセスをへて、ジンは、「顔が見える他者」を引き寄せるメディアとなり、それが、SNS隆盛の時代に世界で広がりをもつ魅力ともなっている。

謝辞

フィールドワークとメディア実践、GMZ作りと頒布をとおして多くの方々と出会い、暖かい支援とアドバイスを受けました。全てのお名前をあげることができませんが、心から感謝しております。ここに一部の方々と団体のお名前を記させていただきます。Hamja Ahsan, Kathryn La Barre, Joe Boyd, Andrew Burgin, Nicholas Brown, Neville Collins, Stuart Feather, Geneviève Fontier, Beryl Foster, Thomas Garza, Leila Kassir, Catherine Hall, Stuart Hall, Bill Hethesingten, 諫山三武, John 'Hoppy' Hopkins, 小牧龍太, David Mason, Barry Miles, 小笠原博毅, Jan O'Malley, John O'Malley, Tanya Pexioto, Michael Rustin, Adam Ritchie, Chris Rizo, 立石尚史, Tom Vague, 山住貴志, Bookartbookshop, Chicago Publishing Resource Center, Housmans Bookshop, Irregular Rhythm Asylum, London Centre for Book Arts, London Print Studio, Quimby's Bookstore, Urbana-Champaign Independent Media Centre.

注

- 1) たとえば、1990年代にはライオット・ガール (riot grrrl) と呼ばれた女性パンクロック活動とフェミニズムの流れから展開したガール・ジンが隆盛した (ピープマイヤー 2011 [2009], 大垣 2005, Darms 2013, 参照)。また、イギリスのフットボールのファンジンのように、地域に根ざした複雑なアイデンティティの政治を反映したものもある (小笠原 2016, 参照)。
- 2) 「En-Zine (Zineの輪): 反時代的対話醸成装置」は、小笠原博毅 (神戸大学) の司会のもと、諫山三武 (『未知の駅』編集人)、立石尚史 (『Football Activist』

- 制作者)、西川麦子(‘Grassroots Media Zine’ライター)が、それぞれの Zine 制作をめぐる活動、読者や関係者からの反響やコミュニケーション、Zine と自分との距離感、Zine のとらえ方などについて話した。座談会の収録音源を編集して Harukana Show でも放送し、音声とともに、4人それぞれの文章を添えて番組サイトに掲載している。[Harukana Show Podcast, No. 222-225, En-Zine トーク (1)~(4)]
- 3) WRFU は低出力のラジオ局であり、半径10kmほどの範囲に電波が届き、12万人あまりの住民がラジオから受信できる。また、2016年1月からは、インターネットによるストリーム配信も開始した。wrfu.net にアクセスすれば、世界中から WRFU のラジオ番組の生放送を聞くことができるようになった。Harukana Show は、2017年1月末までに306回の番組放送を重ね、これまで日米を中心にさまざまなゲストを迎えることができた。(西川 2012, 2013a, 2013b, 2013c, 2014a, 2014c, 2016c, 参照)
 - 4) Harukana Show では、DIY カルチャーを、大量生産・消費のライフスタイルを見直し、クリエイティブな暮らし方、生き方の経験や知恵や方法を、他者とシェアしながら楽しむ、という意味でとらえている。
 - 5) グラスルーツ・メディア・プロジェクトについては、Grassroots Media Zine のウェブサイト参照。
 - 6) 甲南大学文学部社会学科の専門科目「フィールドワーク研究」では、受講生たちは学外で行った取材をもとに各自がジンを作成し、これらを教室に並べて読み合う「ジン大会」を実施する(注23参照)。「メディア文化論」では、地域メディアについて学び、「ひがしなだコミュニティ・メディア」(神戸市東灘区の地域メディア、NPO)と UCIMC の WRFU-LP と連携した授業をすすめている。受講生たちは2つの班に分かれ、HCM の Media Rocco の定期配信の動画番組か Harukana Show のラジオ番組を制作し、実際にユーストリーム配信やラジオ放送に参加し、実践とおしてオルタナティブ・メディアの可能性を考える。
 - 7) Chris Rizo へのインタビューの抄訳は Harukana Show のブログに掲載している。「Blog: Chris さんのインタビュー (April 22, 2011) Zine: メインストリームに抗するメディア」Nov. 20, 2016
 - 8) 「ゆったり Zine な土曜日~Midwest Zine Fest@IMC, Harukana Show Old Blog, May 1, 2011
 - 9) 「Midwest Zine Fest, April 30, 2011」, Harukana Show Albums
 - 10) 「しばしば作者の手書き文字が組み込まれ、そこにはハサミでおおざっぱに切った跡、文章、図をページに貼りつけるテープの線がある。そのジNSTA の身体性—ジン制作に取り組む実際の肉体的行為—は目には明らかで」、「ジン作者とジン読者の身体を引き合わせる一種の肉体的関係 (corporeal connection) をも作り出す」(ピープマイヤー 2011: 132)。
 - 11) GMZ 1 の PDF 版を、各章日本語の要約をつけて、Harukana Show のサイトにもアップロードした (Harukana Show Zine & Paper 参照)。
 - 12) 一つは、ジョージ・クラークによる「コミュニティ」活動である。住民構成が多様で流動的な地域において、とりあえず地理的な範囲を設定しこれを基盤にした住民組織を作り、コミュニティ意識を育みながら地域をつくる。もう一つは、ジョン・ホッピー・ホプキンスが手がけたような「情報のネットワークの形成とイベント開催」型の活動であり、集団の形成や維持を目的にするのではなく、あるアイデアに共感する人々が、資金、知恵、経験、労力を出し合い、協働してイベントやプロジェクトを実施し、そこでの参加者の出会いを次の活動へと活かす。そして三つめが、ベリル・フォスターが関わったような「当事者が抱える問題の可視化と共有、解決への取り組み」であり、住民たちが問題を認識し、その改善、解決に向けて議論、交渉、抗議し直接行動を起こす運動の進め方である (西川 2015: 151-152)
 - 13) インニクは、インターネットで発注できるオンデマンドの印刷会社である。ホームページの随所に記されている印刷をめぐるエッセイや印刷用語解説に興味をもち、印刷をめぐる文化を発信する会社の「印刷コンシェルジュ」に会い、GMZ 3 について直接説明して紙を選んでもらいたいと考え、連絡をとった。インニクを訪問し、ここで作られたユニークな雑誌や本、印刷物を手にとり、工場を見学させてもらった。この体験は、2016年9月にロンドンで、ジンを扱う場所だけでなく、ジンなど自主制作出版物を作る印刷、製本機械をそなえた場所をみたいという関心へとつながった。
 - 14) 日本からリッチへは、80部の GMZ 3 を送った。リッチが、ジンを受け取った友人たちから寄付を募り、これにより日本からイギリスへの郵送費をまかなうことができた。
 - 15) Housmans Bookshop へは、2015年に GMZ 2 を10部、2016年に GMZ 3 を60部送った。この書店は、2016年には地下を改造し古本売場を拡大した。筆者が2016年9月に訪問したときには、キャサリン・ホールや故スチュアート・ホールの蔵書の一部が寄贈されここで扱われていた。ジンコーナーも、地下に移動し、A4版の GMZ 3 は本棚の最下段にまとめて平積みされていた(写真3)。ハンズマンズ書店や、アメリカのシカゴにある多くのジンを持つ Quimby's Bookstore でも、委託販売の売り上げは、書店と依頼者のあいだで折半する契約である。
 - 16) 2016年9月15日 Housmans Bookshop で開催された Heathcote Williams, 'Brexit Boris: From Mayor to Nightmare' 出版記念トークイベント。
 - 17) 2016年9月17日、ノッティングヒルにあるフェザーの自宅を訪ね、インタビューを行った。フェザーの話によると、1971年に Gay Liberation Front を設立する時にもまず、ハンズマンズ書店の建物内に事務所を借りて、その後ノッティングヒルに活動の拠点を移した。ホプキンスがロンドン・フリー・スクールを設立した際と、運動の始め方が似ており興味深い。
 - 18) 2015年と2016年の8月と9月に、下記の場所を訪問

した。イギリス、ロンドンの、Institute of International Visual Arts (Invia) の Stuart Hall Library, London College of Communication (University of the Arts of London) の図書館、ICA (Institution of Contemporary Arts) で2016年9月10日に開催された Artist Self-Publishers' Fair, Housmans Bookshop, bookartbookshop, ROUGH TRADE, London Print Studio, London Centre for Book Arts, アメリカ、シカゴの Quimby's Bookstore, CHIPRC (Chicago Publishing Resource Center), アーバナの Urbana Champaign Independent Media Center 内のジン・ライブラリーなどである。そこでの取材の詳細は、Harukana Show のブログに、ロンドンから Zine レポート (1)~(8)、イリノイから Zine レポート (1)~(3) として、文章と写真を添えて報告している。

- 19) GMZ 3 で特集を組んだ故ホプキンズ (John 'Hoppy' Hopkins) は、私とのインタビューのなかで自らをアーティスト称していたので、ブックアートブックショップを訪れるようなアートに関心をもつ人々に手にとってもらいたいと考え、装丁やレイアウト、イラスト、フォントなどを工夫した。2016年4月にGMZ 3を発行してすぐに、ブックアートブックショップには、日本から3冊郵送した。2016年9月に予告せずにこの店を訪ねると、GMZ 3が、表紙が見えやすいように立てかけて展示されていた。ペイショットは、「来た人に手に取って見てもらえるようにそこに置いたわ。まだ、誰も買った人はいないけれど」と言い、それからまたいろいろな話をしてくれた。
- 20) Harukana Show Podcast No. 224, July 10, 2015.
- 21) カシアには、事前にメールで5つの質問を送った。
①大学図書館になぜジン・コレクションを作ろうと考えたのか。②市販の書籍のような流通経路がないジンをどうやって収集したのか。③図書館ではジンをどのように分類しているのか。④最近のジンの傾向や流行はあるか。⑤大学の授業ではどのようにジン・コレクションを利用しているのか。
- 22) 「Blog: ロンドンから Zine レポート (3) ROUGH TRADE & Fanzine, 'Vague', Sept 17, 2015」
- 23) 甲南大学文学部社会学科の「フィールドワーク研究」の授業では、対話を生みだすジンの特性を活かした「ジン大会」を行う(注6)。学生が制作した一つ一つのジン作品は、取材内容も大きさや形もレイアウトも色も紙の種類もさまざまである。それぞれのジンの横には白い紙をおき、読んだ人が感想を書いていく。参加者は他人が作った多数の手作り作品を読み、その多様性に驚き、巧い下手はあるけれど、その思い入れに触れ、感動したり、驚いたり、あるいは、手抜きを見抜く。自分の作品へのコメントを緊張して読み、書いてくれた人の心遣いに感謝し、これだけ時間をかけてやってよかったなあと思い、また伝えられなかったことについて悔しさがこみ上げたりする。こうしたやりとりのなかで、調査によって情報を得るだけでなく、それを形にして「伝える」ことを意識する。なかには、提出したジンを返して欲しいと申し出る人もいる。話

しをしてくれた祖父に、妹に、大切な誰かにプレゼントするのだという。

- 24) Urbana Free Library において、Zine 作りワークショップ "Telling Our Stories: Make a Zine!" が 2016年11月7日、14日に開催された。
- 25) St. Louis Public Library のジン・コレクションが、2016年10月13日にオープンした。
- 26) Harukana Show Podcast, No. 296, Nov. 18, 2016

参考文献・資料

参考文献

- アンダーソン, クリス著, 関美和訳
2012 [2012] 『MAKERS—21世紀の産業革命が始まる』NHK 出版
- Bartel, Julie
・2004, 'From A to Zine: Building a Winning Zine Collection in Your Library', American Library Association
- Boyd, Joe
・2006, 'White bicycles: making music in the 1960s', Serpent's Tail
- Cultural Typhoon 2015
・2015, "Cultural Typhoon 2015, RE: public", <http://c-t.sub.jp/2015/kansai/file/CT2015program0610.pdf>
- Darms, Lisa and Fateman, Johanna
・2013, 'The Riot Grrrl Collection', Feminist Press
- Duncombe, Stephen
・2008 [1997], 'Note From Underground: Zines and the Politics of Alternative Culture', Microcosm Publishing
- Friedman, R. Seth
・1997, 'The Factsheet Five Zine Reader: The Best Writing from the Underground World of Zines', Three Rivers Press
- Gunderloy, Mike and Janice, Cari Goldberg
・1992, 'The World of Zines: A Guide to the Independent Magazine Revolution', Penguin Books
- Hopkins, John
・2008, 'FROM THE HIP: Photographs by JOHN "HOPPY" HOPKINS 1960-66', DAMIANI
- 石川理恵
2012, 『リトルプレス! Zine! フリーペーパー—自由に遊ぶDIYの本づくり』グラフィック社
- Miles, Barry
・2003 [2002], 'In the Sixties', Pimlico
・2010, 'London Calling: A Countercultural History of London since 1945', Atlantic Books
- 西川麦子
・2004, 「ロンドン、ハマースミスにおける1970年代のコミュニティ開発の実験的試み」『甲南大学紀要文学編131社会科学特集』pp. 79-108
・2007, 「ロンドン、ノッティングヒルにおける1960年代初めのコミュニティ活動の試み—あるメソジスト教会牧師とニュー・レフト活動家の取り組み—」『甲南大学紀要文学編146社会科学特集』pp. 39-67
・2009, 「ロンドン、ハマースミスにおける住民の活動

- の場としての『地域』の創出—情報のネットワークと個人の選択を基盤としたレジデンツ・アソシエーション—『甲南大学紀要文学編156社会科学特集』 pp. 145-176
- ・ 2010, “Creation of “Community” for Residents’ Activities in Hammersmith, London: Residents’ Association Based on Information Network and Individual Choice” 『甲南大学紀要文学編』 No. 160, pp. 176-197
 - ・ 2012, 「コミュニティラジオをグローバルに開く〜アメリカ, イリノイ州, WRFU-LP の日本語番組の試み」 『甲南大学紀要文学編』 No. 162, pp. 51-68
 - ・ 2013a, 「多文化接触のメディア空間—米国のコミュニティラジオから」 『世界思想』 40号, 2013年春, pp. 18-21
 - ・ 2013b, 「運動としてのコミュニティ・メディア—アメリカ, イリノイ州, WRFU-LP とグローバルなネットワーク—」 『甲南大学紀要文学編』 No. 163, pp. 133-152
 - ・ 2013c, “A Media Space for Cultural Exchange: Exploring Community Radio in the United States”, Garza, Thomas ed. ‘*Grassroots Media Zine*’, No. 1, pp. 1-18 Harukana Show org. <http://harukanashow.org/archives/category/zinereport>
 - ・ 2014a, 「地域の多様性をつなぐメディア実践—アメリカ, イリノイ州, アーバナ・シャンペーンのメディア表現者たち—」 『甲南大学紀要文学編』 No. 164, pp. 113-132
 - ・ 2014b, “The Ghost of George Clark: From An Interview With Stuart Hall”, Thomas Garza ed. ‘*Grassroots Media Zine*’, No. 2, pp. 3-44, Harukana Show org., <http://harukanashow.org/archives/category/zinereport>
 - ・ 2014c, 「コミュニケーションツールとしてのラジオ」 『建築雑誌』 Vol. 129, No. 1665, pp. 30-31
 - ・ 2015, 「1960年代, ノッティングヒルの『新しい』コミュニティ活動に関する研究序説—スチュアート・ホールからの問い—」 『甲南大学紀要文学編』 No. 165, pp. 141-157
 - ・ 2016a, 「1960年代, ノッティングヒルにおけるロンドン・フリー・スクールのメディア戦略—John ‘Hoppy’ Hopkins の『ハプニング』の作り方—」 『甲南大学紀要文学編』 No. 166, pp. 87-104
 - ・ 2016b, “John ‘Hoppy’ Hopkins: interviews from 2009-2014”, ‘*Grassroots Media Zine*’, No. 3, pp. 1-70, Harukana Show org.
 - ・ 2016c, 「アクションリサーチ法」, 工藤保則, 寺岡伸悟, 宮垣元編 『質的調査の方法—都市・文化・メディアの感じ方』 第2版, 法律文化社, pp. 144-155
- 小笠原博毅
- ・ 2016, 「紙の上の懲りない活字たち—あなものをぐるほし, フットボール・ファンジン」 『未知の駅』 Vol. 6, pp. 80-83
- ピープマイヤー, アリソン著, 野中モモ訳
- ・ 2011, 『ガール・ジン: 「フェミニズムする」少女たちの参加型メディア』 太田出版, Piepmeier, Alison, 2009, ‘*Girl Zines: Making Media, Doing Feminism*’, New York University Press
- タテイシナオフミ
- ・ 2016, 「手づくりの叫びかた—ZINE と DIY をめぐって」 『未知の駅』 Vol. 6, pp. 78-81
- Williams, Heathcote
- ・ 2016, ‘*BREXIT BORIS: From Mayor to Nightmare*’, Public Reading Rooms
- Wreck, Alex
- ・ 2014, ‘*Stolen Sharpie Revolution: A DIY Resource For Zines and Zine Culture*’, 5th edition, Lunchroom Publishing
- Zine**
- Chicago Publishers Resource Center
- ・ 2013, ‘*ZINES 101*’, CHIPRC
- 大垣有香
- ・ 2005, 『Riot Grrrr! というムーブメント—「自分らしさ」のポリティックス』 遊動社パンフレット3, 遊動社
- さぶ (編集長)
- ・ 2016, 『未知の駅』 Vol. 6
- タテイシナオフミ
- ・ 2011, 『DIY TRIP—手作り印刷と DIY 精神をめぐる旅—シアトル・ポートランド編—』
 - ・ 2013, 『FOOTBALL ACTIVIST』 Vol. 1
 - ・ 2014, 『SOLO JOURNEY BY THREE』
 - ・ 2015, 『T シャツ印刷であそぶ ZINE』
- Thomas Garza, ed.
- ・ 2013, ‘*Grassroots Media Zine*’, No. 1, Harukashow Org.
 - ・ 2014, ‘*Grassroots Media Zine*’, No. 2, Harukashow Org.
 - ・ 2016, ‘*Grassroots Media Zine*’, No. 3, Harukashow Org.
- Urbana Champaign Independent Media Center Library
- ・ “A pocket guide to the Urbana-Champaign Independent Media Center Library”, UCIMC Library
- Harukana Show Website**
- Harukana Albums:
- http://harukanashow.org/archive/HARUKANA_SHOW/Harukana_Albums/Harukana_Albums.html
- ・ 「Midwest Zine Fest, April 30, 2011」
- Harukana Show Blog : <http://harukanashow.org/archives/category/mugi-chan-blog>
- 西川麦子
- ・ 「Blog: ロンドンから Zine レポート (1) Stuart Hall Library, Invia & Housmans Bookshop, Sept. 11, 2015」
 - ・ 「Blog: ロンドンから Zine レポート (2) London College of Communication の Zine Collection, Sept. 16, 2015」
 - ・ 「Blog: ロンドンから Zine レポート (3) ROUGH TRADE & Fanzine, “Vague”, Sept. 17, 2015」
 - ・ 「Blog: ロンドンから Zine レポート (4) Bookartbookshop, Sept. 18, 2015」
 - ・ 「Blog: イリノイから Zine レポート (1) Quimby’s Bookstore: Zine が生き生きと並ぶ, Chicago, Aug. 7,

- 2016]
- ・「Blog: イリノイから Zine レポート (2) CHIPRC, Zine Culture をはぐくむ草の根の活動, Chicago, Aug. 7, 2016]
 - ・「Blog: イリノイから Zine レポート (3) Champaign-Urbana でゆるやかなジンつながり, Aug. 21 & 23, 2016]
 - ・「Blog: ロンドンから Zine レポート (5) Housmans Bookshop & Bookartbookshop, Spet. 9, 2016]
 - ・「Blog: ロンドンから Zine レポート (6) Artist Self-Publishers' Fair, Sept. 10, 2016]
 - ・「Blog: ロンドンから Zine レポート (7) GMZ#3 が つなぐ縁, Sept. 11-19, 2016]
 - ・「Blog: ロンドンから Zine レポート (8) London Print Studio & London Centre of Book Arts, Sept. 20, 2016]
 - ・「Blog: Chris さんのインタビュー (April 22, 2011) Zine: メインストリームに抗するメディア」 Nov. 20, 2016
- Harukana Show Old Blog :
- http://harukanashow.org/archive/HARUKANA_SHOW/Mugi-chan_blog/Mugi-chan_blog.html
- ・「ゆったり Zine な土曜日~Midewst Zine Fest@IMC」 May 1, 2011
- Harukana Show Podcast : <http://harukanashow.org/archives/category/harukana-show-podcast>
- ・「No. 4-1, April 22, 2011 アメリカの Zine とは？」
 - ・「No. 209, March 27, 2015, レコードショップに Zine があった頃 with Tom-san」
 - ・「No. 222, June 26, 2015, En-Zine トーク (1) Tateishi さんの ZINE な生き方」
 - ・「No. 223, July 3, 2015, En-Zine トーク (2) 途中を形にして共有する with Mugiko」
 - ・「No. 224, July 10, 2015, En-Zine トーク (3) もう一つの生き方, やり方 with Sabu-san」
 - ・「No. 225, July 17, 2015, En-Zine トーク (4) スコットランド, グラスゴーでファンジンの世界に出会う with Ogasawara-san」
 - ・「No. 270, May 20, 2016, GMZ#3 物語 (1) 『印刷コンシェルジェ』に会いに東京へ, イニユニク訪問」
 - ・「No. 271, May 27, 2016, 『アメリカーナ』, GMZ#3 物語 (2) Zine の歩き方」
 - ・「No. 287, Sspt. 16, 2016, Zine collection をライブラリー

する with Kathryn」

- ・「No. 296, Nov. 18, 2016, HS リバイバル (No. 4), 今こそ Zine, with Chris」
- Harukana Show Zine & Paper : <http://harukanashow.org/archives/category/zinereport>
- ・「Grassroots Media Zine#1 (in English): A Media Space for Cultural Exchange」 Sept. 20, 2013
 - ・「Grassroots Media Zine 創刊号」 Sept. 20, 2013
 - ・「Grassroots Media Zine#2 (in English): an Interview with the late Prof. Stuart Hall」 April. 20, 2014

URL

- ・bookartbookshop: <http://www.bookartbookshop.com>
 - ・Champaign Urbana Immigration Forum : <http://immigration-forum.blogspot.jp>
 - ・Chicago Publishers Resource Center (CHIPRC): <http://chiprc.org>
 - ・Grassroots Media Zine: <http://grassrootsmediazine.org/>
 - ・Barnard Zine Library: <https://zines.barnard.edu>
 - ・DIY CULTURES: <http://diycultures.tumblr.com>
 - ・Harukana Show: <http://harukanashow.org/>
 - ・Housmans: <http://www.housmans.com>
 - ・イニユニク : <https://inuuniq.co.jp>
 - ・Institute of Contemporary Arts: <https://www.ica.org.uk>
 - ・LCC Collections and Archives: <http://www.arts.ac.uk/study-at-ual/library-services/collections-and-archives/london-college-of-communication/>
 - ・London Centre for Book Arts: <http://www.londonbookarts.org>
 - ・London Print Studio: <http://www.londonprintstudio.org.uk>
 - ・Media Rocco: <http://mediarocco.jp>
 - ・Quimby's Bookstore: <http://www.quimbys.com>
 - ・Stuart Hall Library: <http://www.iniva.org/library>
 - ・Urbana Champaign Independent Media Center: <http://www.ucimc.org>
 - ・VAGUE: <http://tomvague.co.uk>
 - ・WRFU-LP 104.5 FM: <http://www.wrfu.net>
 - ・Zine at the Brooklyn College Library: <https://brooklyncollegezines.commonsc.gc.cuny.edu>
 - ・Zine Libraries: <https://zines.barnard.edu/zine-libraries>
- *Website の最終アクセスは全て2016年12月17日